ブレーズ・サンドラール小伝(3)

加　太　宏　邦

わが詩人が生れた頃の父は、ラ・ショ=ド=フォンで、役所の記録によると、その実体はよくわからないながらも、とにかく「勤め人」をしていて、又、ド・ラ・ペ通り27番地からパルク通り45番地へ、やがて引越して行く。このあたりはとくに時計製造業者が集まっていた地区であったので、父は町の人名録の職業欄には「時計製造人」と適当なことを記載した。

当時、近所には、父方の祖母のフランソワーズ=エリザベートや四人の伯母(エヴァ、マティルド等)が住んでいた。伯母は四人共独身でしかも共に小学校の先生をしていた。祖母はもう未亡人になっていたし、かなり高齢であったが、元気なもので、「電信館」という名の喫茶店を営なんだりしていた。又、伯父のエルネストは大規模な印刷工場を経営していた。要するにソゼー族は、よそ者ながら着実にこの土地に根をおろしはじめていたのである。

母方のドネル家も、ここではまだ二代目ではあったが、時計屋、料理人、視学官などをつとめる伯父らが住んでいて土地になじみをひろげていった。

そういう近親者の中で、事業欲の強い野心家で、およそ安定ということからほど遠い性格のジョルジュ、すなわちわが詩人の父だけがいつまでたっても職を定めることが出来なかった。

近所でも有名だった。みんなは彼のことを「ジョルジュおっさん」と呼んで中ば好奇心で、中ば心配してそっとながめていた。

ある日、ジョルジュは「うまい金もうけの話しがあるんだが」と、この町に住む一人のユダヤ人から声をかけられた。一も二もなくそのもうけ口に乗った。なけなしの金をはたいて共同出資者になった。もちろん、これはお定まりの詐欺で、彼はかんたんに無一文になってしまった。

ところが、こういうことをくりかえして来た彼は、かえって、そういう時に強い事業意欲に目ざめるようで、又ぞろ新らしい商売を考えついたのである。ドイツのビールを南イタリアで売ろうというアイデアであった。どういう才覚なのか、資本を用意してくれる大立物を引込んでいた。

いくつもの大きな樽につめられたビールは列車に山積みされ、ナポリへと旅立った。父は、これからの商売の拠点となる南欧のこの港町へ一家をひきつれて行くことにした。時に、1894年６月14日、サンドラールがまだ６歳と９ヶ月の時であった。

暑い夏だった。サンプロン・トンネルはまだ開通していなかったからサン＝ゴタール・トンネルを通ってベリンゾーナ、キアソ、ミラノ、ローマと南下してナポリへ着いたのだろう。所が、ナポリまで来てみたがもうとっくに着いているはずの先便で出したビールの方がまだ駅に到着していなかった。途中の駅で、度々、連結待ちのため待避させられているらしい。心配して待つ内に、それでも何日かおくれてナポリへ荷物は入って来た。しかし炎天下の引込線で何昼夜も過したビールは泡も立たない麦の腐水になってしまっていた。ソゼー家は進退極まった。故郷の人々は直ちに強制送還でもされて帰って来るだろうと噂をしていた。しかし、どういう手だてがあったのか、サンドラールたちはこの南国の港町にこれからあと一年以上も住むことになったのである。

所でこのイタリア移住について、詩人の兄は『私たちがナポリに着いたのは1894年９月26日だった」と後に語っている。これは少し気になる発言である。というのは出発日の６月14日というのはラ・ショ＝ド＝フォンの警察の住民登録で確かめられている日付なので、これが正しいとすると、彼らは３ヶ月以上かかってナポリに着いたことになる。兄の記憶ちがいなのか。いや、それはほとんどあり得ない。このジュネーヴ大学法学部名誉教授は「丁度自分の10歳の誕生日に着いた」という決定的なおぼえ方をしていたからである。

二つの可能性がある。

ひとつは実際の出発日が、公式記録とちがっていた場合である。ラ・ショ＝ド＝フォンの薬局のトリベ氏の記憶によると、ソゼー家がナポリへ立ったのは「ひどく乾燥したある夏の終りごろだった」そうである。もし、このことば（記憶）を信じるなら、詩人の兄の発言とも矛盾はせず、その出発日を、９月25日頃かせいぜいその２日くらい前だとしてよさそうである。当時、警察では、実際の出国でもって記録していたのか、本人の届出でもってそうしていたのかはよくわからないが。

もうひとつの可能性は、本当に３ヶ月かかったとかんがえることである。実は、

これには今のところ何の証拠もないし、どういう裏づけの証言もない。しかし、ジョルジュ・ソゼがエジプト回りでナポリへ行ったのではないかとほんの少し考えてみたい誘惑もあるのである。それはサンドラールの例の「つくり話」がわたしたちにそういうことを思わせるからである。

詩人は自分の誕生の詩の中で「生後五日目にはブリンディシから船に乗りエジプトの父のもとへとつれられていった」という意味のことをのべている。一方『諸国めぐり』という作品には、子供の時エジプトのアレキサンドリアから〈イタリア号〉という汽船に乗って、南イタリアのブリンディシを経由してナポリへ行ったことが記されている。そして、その港町で、次便で来た父と合流した、それは自分が4歳か5歳の時のことである、という意味のことが書かれている。〈イタリア号〉はアレキサンドリアとニューヨークを結ぶ地中海・太平洋横断汽船であって、もしサンドラールを信じるなら、彼は生れて間もなく母親に抱かれて通った航路を再び逆にとってナポリへたどりついた、ということになる。

そして、もしそうなら、次のように考えることが出来る。父親はエジプトからそのビールの話しのため一旦、ラ・ショ=ド=フォンに帰郷し、話がつくと本式に出国手続をし（これが6月14日？）再びアレキサンドリアに戻り、一家をそこから〈イタリア号〉に乗せビール販売の拠点にでもするつもりだったナポリへ送り出し、自分は身辺を整理し、次便で家族のもとへ合流をした――その間の手続等に3ヶ月かかった、とは考えられないだろうか。もちろん、ビールの荷出しは、彼らのナポリ着と合わせて9月末だった。トリペ氏の発言中には、ナポリへむかった「彼ら」という複数形があるが、この点をのぞけば、かなり同氏の記憶と一致してくる。又、一方兄のジョルジュは「ナポリへ着いた」という表現に、nous avons débarqué à Naples という言い方をしている。débarquer は　列車の到着にも使うが、本来、普通には下船の意味である。

しかし、さきにも言った通り、この推測には根拠がとぼしい。いまだに、沢山の真面目な本には、サンドラールが幼少の頃、エジプトに滞在していたことが略歴としてのせられているが、すべてサンドラールの口から出たことだけに依拠し、これは何度も言ったが、一番信じられないのである。そうは言っても彼の言うことには、それを信じたいという気持にさせる何とも言えぬ魅力があることも事実なのである。これをふっ切ろう。何度も登場願っている薬屋さんトリペ氏は「ジ

ョルジュおっさんの息子が、あの旅について書いているのを読むと、失礼ながら、ふき出すのをこらえられんのだよ。そこにはひと言も本当のことは書いてないからな」と断言なさっている。

ナポリ時代の話しに入ろう。学齢に達しているソゼ三きょうだいは学校へ通うことになった。その学校はスクオーラ・インテルナツィオナーレ（国際学校）と言った。経営者（校長）はドクトル・プリュスという人であったと言う。スイス人である。つまりここは外国人子女のための学校で、サンドラールたちが通うのには一番自然なところと言える。

この頃のナポリ市の古い案内書を探してみると市内の外国系学校として国際学校（男子校）、同じく女子校、福音教会学校(イギリス系）の三つがあげられている。又、この内、スクオーラ男子校だけは校長の名があげられていて、それによると Max Voigt となっている。これはサンドラールの証言――プリュス氏――と合致しない。所が、偶然なことに放送作家のニーノ・フランクが1962年の『メルキュール・ド・フランス』によせた１ページ半ばかりのエッセーによると、彼も又、スクオーラ・インテルナツィオナーレの卒業生であったらしく、時の校長の名はフォークト Vogt という「ニーチェのようなひげをたくわえたこわい先生」だったと言明している。Voigt とは多少綴りがちがうが、まず同一人物と見てまちがいなかろう。ただ、念のためニーノ・フランクを「フーズ・フー」の仏国版でみてみると、1904年生れとなっていた。サンドラールと17歳もちがう。普通６歳か７歳で学校へ行きはじめるとしても、彼が入学したのは1910年頃となってしまう。一方、わが詩人は1896年の前半にはもう帰国してしまっている。してみると、二人には14年間のひらきがある。この間に校長が交替した可能性は充分ある。所が、ニーノ・フランクには兄がいて、その兄がやはり同校に通っていたらしく、ニーノ・フランクの言によれば、その年代とサンドラールが通学していた時代が重なっているはずで、兄も又、校長はフォークト先生だとしょっちゅう言っていた、というから少し奇妙なことになる。もちろん、それでも、この矛盾は、ニーノ・フランクが理解しているサンドラールのスクオーラ在学年度（おそらく詩人の口から聞いたのだろう）が「1893年から1897年」というあいまいさが原因になっていると考えられなくもない。ソゼ一家は、実際は４年間もナポリに住んでいたのではなかった。いつスイスに帰国したのかは今日、まだはっきりとはつかめ

ていないが早ければ1895年12月か翌年１月、おそくても４月頃らしく、要するにイタリアにいたのはせいぜい１年半くらいだったようだ。

サンドラールと兄のジョルジュの通ったスクオーラ男子校はナポリの中心の中央駅から約３kmほど西南のサン・カルロ・アレ・モルテル通り26番地にあった。ほとんど郊外と言ってよい。一方、姉のマリ=エリザベートが通った女子校はアメデオ通り137番地にあって、さらに800メートルほど西に位置していた。いずれも市域の西端である。ただし、今日のナポリはかっての何倍にもふくれていて、このあたりも、いつの間にか、市の中心とは言えないまでも、中心部に接する区域となってしまっている。

今日では120万人の人口を持つナポリも、当時は49万人の町だった。しかし限られた市域の中で、とくにローマ通りの東西には地図にも描ききれないぐらい複雑で小さな迷路が網の目のようにめぐらされ、ここに又、信じられぬくらいの人口が密集し、いわゆる「下町」を形成していた。とくにこの地区の環境の劣悪さが大問題となったのは、1884年、すなわちソゼー家がこの町へ来る10年前にコレラが大流行した時のことである。死者のほとんどはこの下町に住む人々であった。丁度このころ、すなわち、明治の初年、ある日本人がこの町をおとずれこんな感懐をのべている。「伊国の名勝を称する者先ず第一にナポリをあぐるも真に故あるなり。貿易繁昌にして馬車絡繹たり。然れども古府なるをもって道路狭隘、加うるに不潔の場所と貧民の多きとにより、この名勝を没却するは惜むべきなり」

市と国は巨額の出費をしてでも、この地区の整備に着手せざるを得なくなった。古い建物をとりこわし、道路をひろげ、その結果、居所をおわれた人々のためにニュー・タウンをつくるという大げさなことになった。

サンドラールの父が、一文無しでいながらナポリに一年半ほど住んでいられたのは、どうもこの「公共投資」のおこぼれにあずかれたからではないかと思われる。

このニュー・タウンはナポリの西郊の山頂をけずり取って、東西1.5km、南北１kmほどの区画の整然とした町として計画された。もともとヴォメロ村というのがそこにあったので、ここを、リオーネ・ヴォメロ（ヴォメロ街）とした。

詩人は、この大事業の計画者が、あたかも父であるように書いているが、これは全く信じられない。ビールを売るつもりの男が、どうして急に土建会社などを

興すことが出来よう。ただ、父がヴォメロ街と深い関係がある仕事をしただろうことはうすうす推測される。それは、サンドラールの「つくり話し」の中で、ナポリについてはヴォメロ街のみが具体的なイメージをともなっているのに対して、他の地名は、単なる記述だからである。又、彼のナポリ絵図は、よしんばすべて嘘としても、スクオーラやヴォメロのあった西のはずれにのみ焦点があてられているので、やはり、何らかの意味での生活の拠点――家庭か、学校か、父の職場か――があったことは信じてよいのではないだろうか。

そして、貧乏なよそ者が住み得た場所は、もちろん、今までならローマ通りの東西であっただろうが、今は、ヴォメロ街だろう。サンドラール一家もそこに住んだのではないだろうか。

標高250mの丘の上に出現しつつあった新住宅地へは、町の中心部からと、もう一方海側からと、二本のケーブルカーがつけられた。（今日ではもう一本ある）。で、ヴォメロに住んでいたとすれば、三人の子供達はケーブルカーをつかって目の下の学校へ通ったのだろう。もしかしたら徒歩で、サン・テルモ城を横に見てサン・マルティノ国立美術館の西側に出て、つづら折の急坂をかけおりてふもとの学校へ行ったのかもしれない。

サンドラールと兄はこのスイス人校長の学校で多分ドイツ語で教育をうけたと思われる。ただ、彼の家庭がどちらかというとアレマニクであったことや、普通のスイス人の常識から言って、それはそんなに異常なことではなかった。もちろん、この学校は、何ヶ国語も喋れる教師が自由自在にそのことばをあやつって教育をした、といわれるから、ドイツ語だけでなく、さまざまなことばがとび交っていたことだろう。さらに、外国人子弟だけでなく、土地の金持（ニーノ・フランクによれば、その他に「見栄ぱり」）の子供達もいたから、イタリア人の友達も出来ただろう。こうやって、わが詩人は小さい頃からひとつの祖国などに意味をかんじない人間になっていった。ただそれは無政府主義的な反祖国でなく、むしろ、汎ヨーロッパ的な愛国主義のようなものである気がする。

彼はスクオーラについては何も書きのこしていない。しかし、サンドラールと語り合うことの多かったニーノは「校長の名をのぞいては」その運動場、ユーカリの樹、虫くいのある体操道具、螺旋階段などを共通の思い出として、たがいになつかしがった、と書いている。

ジョルジュ・ソゼの子供たちは、こうやって、おかしな父親のおかげでナポリで生活し、その中へごく自然にとけこんでいった。

高台の住居から、東の方を見上げると煙を高くふき上げているヴェスヴィオ山が見える。目を転じて海の方を見おろせば、商船のいそがしく出入りする港の賑わいが見える。丘をおりて町中へ入れば、そこには下町の活気がある。窓から窓へ洗濯物の吊橋がかかり、万国旗のようなアーケードをつくっている。ナポリ方言で何やら騒々しくやりとりをしている店のあるじと客。少年サンドラールは兄と手をつないで、びっくりした顔をして、露路から露路へと歩き回ったことだろう。秋が終り四季はめぐり、またたく間に１年と何ヶ月かが経った。

ある日、父と母が「帰ろう」と子供達に言った。「どこへ？」「スイスへだ」「ラ・ショ＝ド＝フォン？」「いや」。ジョルジュは今さらラ・ショ＝ド＝フォンへ帰れるとは考えてもいなかった。妻の両親が隠居して住んでいたヌシャテルの家へころがりこむ他ないと思っていた。

（つづく）

《既　刊　内　容》

▶ロマンディ創刊号(1978年(絶版)
J. de Rham 日瑞協会長のことば
ヴォルテール・ルソー200年忌　富盛　伸夫
セルヴェのジュネーヴ　森　洋二
ラミュの写実と象徴　加太　宏邦
スイス文献一覧(１)
▶ロマンディ第二号(1979年)(残部あり)
ラミュとゾムトール教授　杉山　毅
ル・プチ・スイス　島　久美子
ポール・トゥルニエ紹介　森　洋二
スイスのギュスターヴ・ルー　加太　宏邦
スイス文献一覧(２)
▶ロマンディ第三号(1981年)(残部あり)
ピアジェとその言語理論　箱山富美子
スイス文献一覧(3)ピアジェ特集　大浜幾久子
アリス・リヴァ「汝の日数をかぞえよ」
加太　宏邦
▶ロマンディ第四号(1982年)(残部あり)
ラミュの忍耐　A・ベガン／杉山毅(訳)
トップ・ニュースになった「ロマンディ」　阿部　汎克
スイスと四つ相撲の悲喜劇　鈴木　光子
瑞西独吟　松島　征
ブレーズ・サンドラール小伝(１)　加太　宏邦
スイス文献一覧(４)
▶ロマンディ第五号(1982年)(残部あり)
ラミュの墓　浜崎　史朗
ある瞬間　シェセ／井川浩(訳)
シェセ『ユダ・透明体』　加太　宏邦
ブレーズ・サンドラール小伝(2)　加太　宏邦
陽　師　ユーグ・リシャール
スイス文献一覧(５)